

音楽を専攻する学生の持つ 授業イメージについての研究 1

沖林洋平・高橋雅子

A study on class images of undergraduates majoring music 1

OKIBAYASHI Yohei・TAKAHASHI Masako

(Received September 30, 2016)

問題と目的

本研究の目的は、教育学部の音楽を専門とする学部学生の教員志望意識と音楽の学部教育の教員の資質能力と興味関心の育成について調査することであった。

大学の教員養成におけるモデル・コア・カリキュラムについては、これまでに教大協における研究プロジェクトにおいて研究が進められてきた。例えば、岩田・榊原・玉井・別惣（2007）の「教員養成カリキュラムの到達目標・確認目標の検討」においては、中学校教員養成における〈教科〉の在り方を中心に、カリキュラムの検討がなされている。音楽については、到達目標を大きく4つ設定し、確認目標を4領域設定し、これら確認目標に対応した内容の項目を設定している。ここでのモデル・コア・カリキュラムの作成に向けた問題提起としては次のようであった。すなわち、「教職実践演習」の内容にしたがって、到達目標・項目例・確認指標例・確認の手だてを策定していただくよう依頼した（岩田・玉井ら、2007）、というものである。これら手続きによって設定された目標について、兼重・高橋・山本・菅生・神部・小島・寺尾・阪本・齊藤・木下（2016）は、それら確認目標が、教員に必要な知識や能力、興味関心の育成にどの程度必要であるかについて現職教員を対象に調査を実施した。その結果、確認目標は5つの因子にまとめられることを示した。それぞれ、指導法の工夫、授業技術、教科書の理解と学習の組み立て、知本的な知識（教材曲、音楽の仕組み、音楽的事象）、基本的な知識（伴奏付け、作編、教材開発、管弦打楽器）と命名された。また、教員の年齢区分と調査に用いられた項目が教員養成への必要性に関連が見られることが示された。

兼重ら（2016）では、モデル・コア・カリキュラムの確認項目を教員の知識や能力、興味関心の育成に必要な項目として、教員を対象に調査したが、本研究では、音楽を専門とする学部学生を対象として調査を実施する。岩田ら（2007）は、教職実践演習は総合的な指導力を固めるために提起されているもので、これを踏まえて教科教育指導力の内実を捉えていく必要がある、と述べている。学部教育を総括する教職実践演習の内容にしたがって策定された項目であるならば、学部学生が、これら項目がみずからの教員養成に対するイメージとどのような関連があるのかを検討することは、教員養成の効果を検証するアプローチの一つになりうるものと考えたためである。また、本研究では、学部の4年生と1年生を対象とすることにより、学部教育の導入時期と最終時期の違いについて検討することとした。

方 法

調査時期 2016年7月に調査を実施した。

調査対象者 本研究では、山口大学教育学部の音楽教育を専門とする学生14名を対象とした。1年生7名、4年生7名で合計14名であった。

調査項目 本研究では、質問紙による調査を実施した。本研究の分析で用いた調査項目は次のとおりである。

1. 音楽教育イメージ尺度（高橋，2016）

全ての対象者に対して、以下の教示を行った。「教育学部の音楽の専門の授業科目について、あなたがこれまでに受講した結果、現在あなたは音楽を指導する教員に必要とされる知識や能力、音楽に対する興味関心はどのようなものと考えますか。」4年生の対象者には、1年時のイメージを問うため、追加して、以下の教示を行った。「入学当初、教育学部の音楽の専門の授業科目を受講することは、あなたが音楽を指導する教員に必要とされる知識や能力、音楽に対する興味関心を養うためにどの程度必要であると考えていましたか。不確かでもかまいませんので、Q1の回答を見ないで、入学当初のあなたの考えを思い出して、下記の項目について、あなたの考え方に合っていた番号に○を付けてください。」

本研究独自の項目として次の質問を設定した。「あなたが大学で受講した教育学部の授業科目で、音楽の指導に関する専門的知識や技術の習得に役立ったと思う授業科目を最大3つ書いてください。」

2. 受講した教育学部の授業科目で、音楽の指導に関する専門的知識や技術の習得に役立ったと思う授業科目

結 果

まず、音楽教育イメージ尺度について、高橋（2016）に基づき各学年で因子毎の平均値と標準偏差を算出した。各学年の平均値と標準偏差をTable1に示す。

4年生の持つ4年次のイメージと1年次のイメージの回想を比較するために、4年生のデータについて、時期（現在と回想）を参加者内要因、因子を参加者内要因とする2×5の分散分析を行った。分散分析の結果、時期の主効果、因子の主効果（ $F(1, 6) = 9.500, p < .05$; $F(4, 24) = 3.268$; $p < .05$ ）が有意であった。2要因の交互作用は有意ではなかった（ $F(4, 24) = 1.017, ns$ ）。

次に、現在のイメージの学年間比較を行うために、学年を参加者間要因、因子を参加者内要因とする2×5の分散分析を行った。分散分析の結果、学年、因子の主効果、2要因の交互作用はどれも有意ではなかった（ $F(1, 12) = 0.366, ns$; $F(4, 48) = 1.667, ns$; $F(4, 48) = 0.827, ns$ ）。1年生と4年生の現在のイメージの比較と4年生の現在と1年次の回想イメージの比較をFigure 1と2に示す。

Table1 音楽教育イメージ尺度の各条件の平均値と標準偏差

	因子1		因子2		因子3		因子4		因子5	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
1年	2.302	1.204	2.429	1.509	2.286	1.116	2.286	0.999	2.464	1.073
4年	1.905	0.574	2	0.556	2.214	0.405	1.714	0.517	2.464	0.795
1年時 回想	3	1.26	3.381	1.605	3.238	0.946	2.381	1.161	3.25	1.052

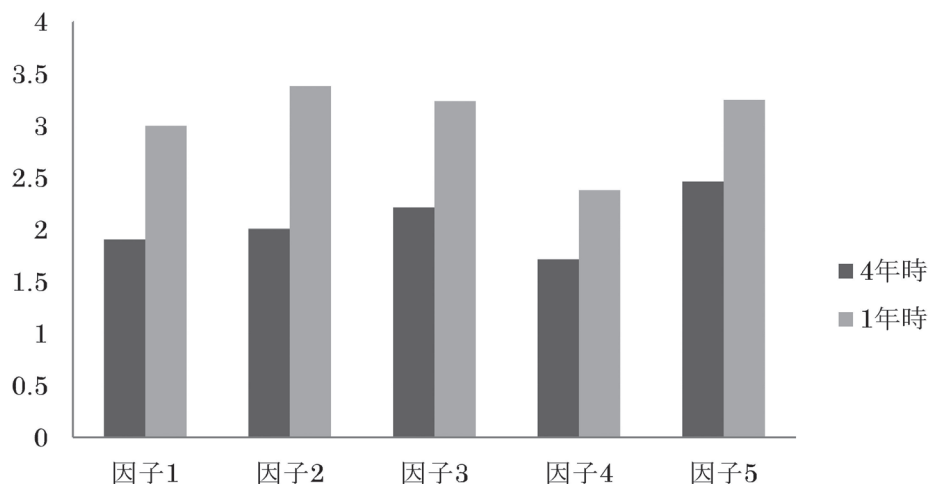


Figure1 4年生の4年時と1年時(回想)の授業イメージ

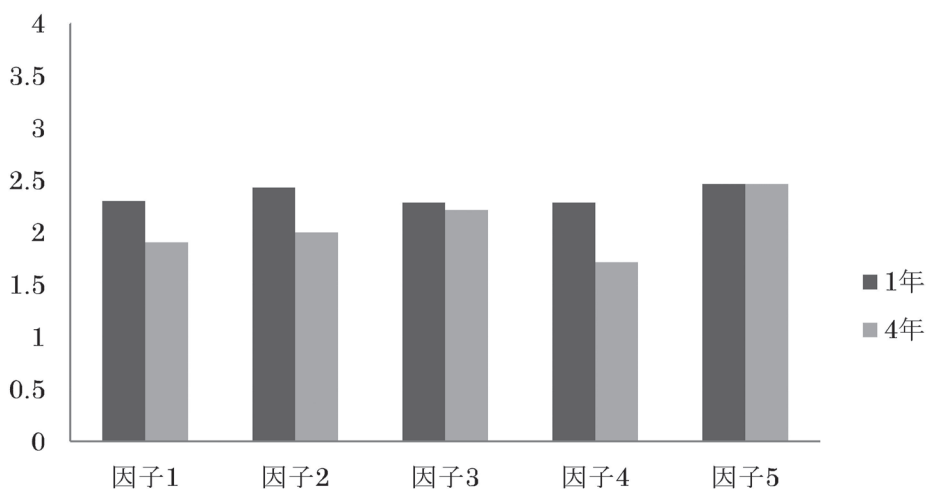


Figure2 1年生と4年生の現在の授業イメージ

考 察

本研究では、高橋（2016）に基づいて、教育学部の音楽を専門とする大学生の音楽教育に対するイメージを検討した。その際、1年生と4年生のイメージの比較ならびに4年生の現在のイメージと4年生の1年次のイメージの回想を調査した。得られた結果について考察する。

まず、4年生の現在と1年次のイメージの比較については、時期の主効果ならびに因子の主効果が有意であった。4年生の現在のイメージが1年次の回想よりも有意に低いことから、4年生は、1年次は現在よりも大学での音楽教育を教員に必要とされる知識や能力、興味関心を育成するための必要性が低いと認識していることが明らかとなった。4年生の1年次回想の平均値は3.05であり、どちらかという必要である、という選択肢に相当するものである。4年

生は1年次のイメージは、全体的に専門教育の教員に必要とされる知識や能力、興味関心の育成への必要性が中程度であったと回想するという結果であった。

それでは、1年生はどのように現在のイメージを持っているのだろうか。1年生と4年生の現在のイメージの比較の結果、学年、因子の主効果ならびに2要因の交互作用の全てが有意ではなかった。すなわち、1年生の現在のイメージは4年生の現在のイメージと有意な違いはないことを示唆する。

4年生は、1年次は、大学教育は教員に必要とされる知識や能力、興味関心の育成に対して現在ほど必要性を感じていなかったと回想する一方で、1年生は現在の4年生と同じように必要性を感じているという結果が得られた。本研究で得られた4年生の回想における現在のイメージとの違いについて、以下に考察する。

4年生は、現在に比べて1年次は大学教育の教員に必要とされる知識や能力、興味関心の育成と低く見積もったことについては、現在のイメージとの違いを明確にする心的なはたらきが働いた可能性がある。秋田(1996)は、大学生219名現職教員125名を対象として、「授業」「教師」「教えること」の3トピックについて「授業(教師, 教えること)は~のようだ。」という形式で比喩を生成し、その比喩の説明を求めた。その結果、大学生や授業を伝達の間であると捉えていたのに対し、現職教員は教師生徒の共同作成の間であると捉えていた。また、教師の役割として、教員は自らを「育て手」「導く者」というイメージとして捉えていた。本研究において4年生が持っていた1年次の回想イメージを現在と違うものと回答した理由としては、このような教えることや教員に対するイメージの変容が1年次と現在を違うものとしたとも考えられる。4年生の現在と回想イメージの違いに交互作用が見られなかったため、因子によるイメージの変化の大きさに有意差はなかった。すなわち、本研究における現在と回想のイメージの変容は本研究で用いた尺度では全体的なものであり、特定の因子に対して生じるものではないと考えられる。

本研究で用いた尺度については、教育効果を測定するために重要な項目を設定していることは明らかである一方で、現在のイメージについて、1年生と4年生で有意差が見られなかったことは、学生が各時点でイメージする教員に必要とされる知識や能力、興味関心に必要なことの内容に対する研究が必要であることを示唆する。なぜなら現在のイメージでは1年生と4年生に違いがない一方で、4年生は1年次のイメージを、1年生が持つ現在のイメージと異なって回想していたからである。

引用文献

- 兼重 直文・高橋 雅子・山本 訓久・菅生 千穂・神部 智・小島 千か・寺尾 正・阪本 幹子・齊藤 祐・木下 大輔 2016 音楽科モデル・コア・カリキュラムに関する研究—現職教員へのアンケート調査をもとに— 教大協全国音楽部門大学部会(長野大会)
- 秋田喜代美 1996 教える経験に伴う授業イメージの変容—比喩生成課題による検討— 教育心理学研究 176-186.
- 岩田康之・榊原禎宏・玉井康之・別惣淳二 2007 教員養成カリキュラムの到達目標・確認目標の検討—中学校教員における〈教科〉の在り方を中心に— 日本教育大学協会「モデル・コア・カリキュラム」研究プロジェクト

本研究で用いた音楽教育イメージ尺度

項目内容

-
- 1 楽曲による題材構成と主題による題材構成の特徴を理解し、指導案を作成することができる。
 - 2 歌唱、器楽および鑑賞教材の特質を踏まえて適切な指導案を作成することができる。
 - 3 音楽学習の活動領域相互の関連を図ることができる。
 - 4 伴奏付けに関する基本的な知識と技能を持っている。
 - 5 作曲・編曲に関する基本的な知識を持っている。
 - 6 作曲・編曲に関する基礎的な技術を持ち、簡単な教材を開発することができる。
 - 7 管・弦・打楽器等、および和楽器に関する基本的な知識と、奏法の基礎的な技能を持っている。
 - 8 歌唱、器楽および鑑賞の教材曲に関する基本的な知識を持っている。
 - 9 学習指導要領の教材選択の観点に基づいて適切な教材を選ぶための基本的知識を持っている。
 - 10 我が国の伝統的な音楽文化および世界の諸民族の音楽に対する基本的な知見を持っている。
 - 11 音楽史の概要をとらえながら、各種音楽を支える風土や文化・歴史との関わりを理解している。
 - 12 音楽と他ジャンルの芸術との関わりを理解している。
 - 13 音楽の仕組み（構造的側面）について説明するための十分な知見を持っている。
 - 14 発声法の基礎を身につけ、自信を持って歌うことができる。
 - 15 歌いながら伴奏することができる。
 - 16 必要に応じて移調して伴奏することができる。
 - 17 児童・生徒の音楽性を喚起するような伴奏をすることができる。
 - 18 児童・生徒の演奏意欲を引き出すような指揮をすることができる。
 - 19 簡単な鑑賞曲の実演をすることができる。
 - 20 合唱、合奏の指導および小アンサンブル指導の基本的な技術を持っている。
 - 21 さまざまな音楽的事象について説明を的確に行うための用語を理解している。
 - 22 鑑賞の指導にあたり、コンピュータ等の機材や映像資料等を効果的に使用することができる。
 - 23 歌唱および演奏の技能習得に効果的な学習形態（ペア学習、グループ学習等）を工夫することができる。
 - 24 児童・生徒が主体的に演奏技能を向上させるために、適切な指導や支援を行うことができる。
 - 25 創作・編曲活動のプロセスにおいて適切な助言、評価をすることができる。
 - 26 鑑賞活動を深めるための基本的な知識の習得に関して、系統的・段階的な指導法を理解している。
 - 27 「表現」と「鑑賞」の活動を有機的に連動させるための創意工夫を行うことができる。
 - 28 生活の中で音楽との関わりを深めるための適切な助言や支援を行うことができる。
 - 29 豊かな情操や音楽を愛好する心情を育むためにどのような指導や支援を行うべきか、理解している。
 - 30 言語活動の充実および共通事項について理解した上で、指導や支援を行うことができる。
 - 31 伝統的な歌唱に関する基本的な知識と、唱法の基礎的な技能を持っている。
 - 32 さまざまな支援を必要とする児童・生徒に対して、適切な対応ができる。
 - 33 「教職実践演習」で4年間の学びを総括し、音楽科教員としての資質を備えることができる。（該当者）
-